

鑑賞領域において音楽を味わって聴く力を育てる小学校音楽科学習指導の工夫 ― 想像したことや感じ取ったことを表すためのパフォーマンス課題を取り入れた学習活動を通して ―

呉市立和庄小学校 藤井 眞實

研究の要約

本研究は、鑑賞領域において音楽を味わって聴く力を育てる小学校音楽科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、本研究における「音楽を味わって聴く力」を、「繰り返し音楽を聴く中で、その音楽のよさや美しさの理由を音楽の中から自ら明らかにして自分なりの意見や感想を表し、自分にとっての音楽の価値を見付けて聴くことができる力」とした。この力を育むために、第5学年において、想像したことや感じ取ったことを表すためのパフォーマンス課題を取り入れ、評価するためのループリックを作成して学習活動を行った。その結果、音楽のよさや美しさの理由を音楽の中から自ら明らかにし、自分にとっての音楽の価値を見付けて聴くことができる力が向上した。このことから、想像したことや感じ取ったことを表すためのパフォーマンス課題を取り入れることは、鑑賞領域において音楽を味わって聴く力を育てるために有効であることが分かった。

キーワード：鑑賞領域 味わって聴く パフォーマンス課題 ループリック

I 問題の所在

国立教育政策研究所「小学校学習指導要領実施状況調査 教科別分析と改善点（音楽）」（平成27年）において、想像したことや感じ取ったことを、音楽を形づくっている要素（音色、旋律等）と結び付けて言葉で表し、楽曲の特徴や演奏のよさを理解して聴いているかを問う問題の通過率は64.2%（うち準正答47.5%）であった。所属校においても、感受はできるものの、音楽を形づくっている要素と関わらせて言葉などで表すことに課題がある。

また、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会報告「児童生徒の学習評価の在り方について」（平成22年）では、学習評価の現状と課題について、「学習状況の評価の資料の収集・分析に負担を感じる」小・中学校の教師は約63%に及ぶことが報告されており、学習評価を生かした授業改善を行うことが今後の課題と考える。稿者自身、音楽を聴いて記述させた感想を評価する際に、評価の妥当性が曖昧で、指導に生かすことが難しい現状がある。

さらに、国立教育政策研究所「小学校学習指導要領実施状況調査」（平成27年）学校質問紙調査では、42.9%の学校が、児童が自主的・自発的に学習するための取組について「『ほとんど』又は『どちらかといえば』実現できていない」と回答しており、児童が主体的に活動する学習指導の実現が必要である。

そこで本研究では、音楽を味わって聴く力を育てるためにパフォーマンス課題を取り入れる。パフォーマンス課題を取り入れることにより、想像したことや感じ取ったことを明確に捉え、その理由を楽曲の音楽を形づくっている要素から見付けて関わらせ、それらを自分なりに言葉などを使って表現するという複数の知識やスキルを使いこなす場面を設定する。これらのことにより、音楽を味わって聴く力を育てることができると考える。

II 研究の基本的な考え方

1 鑑賞領域における音楽を味わって聴く力について

(1) 音楽を味わって聴くとは

小学校学習指導要領（平成20年）音楽の第5学年及び第6学年の目標（3）には、「様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を高め、音楽を味わって聴くようにする。」¹⁾と示されており、基礎的な鑑賞の能力を高めることが、音楽を味わって聴くことにつながると捉えることができる。

「基礎的な鑑賞の能力」について、同解説音楽編（平成20年、以下「解説」とする。）には、「音楽を聴いて、音楽を形づくっている要素のかかわり合いや、それによって醸し出される曲想を感じ取り、味わう能力のことである。」²⁾と示されている。「曲

想を感じ取る」ことについて中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年）には、「例えば、『この曲は優しい感じがする』などと直感的に感じ取った際に、さらに、強弱や旋律に着目して『この曲が優しい感じがすると思ったのは、弱めの音で滑らかな旋律を歌っているからだ』などと音楽の構造とのかかわりにおいて再度とらえ直していく。」³⁾と示されており、音楽を聴いて感じたことの理由を、音楽を形づくっている要素の中から明らかにし、音楽の醸し出す感じを捉えることだと考える。

また、「味わう」について中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年）には、「味わうとは、対象から感じ取ったものの価値を自らの感性によって確認することであり、ここには価値を判断することが含まれている。」⁴⁾と示されている。また大熊信彦（平成22年）は、「『味わう』とは対象のもつよさや美しさなどを自ら確認する行為と言える。」⁵⁾と述べており、音楽の醸し出す感じを自らの感性で捉え、よさや美しさを確認することだと考える。

これらのことから本研究における「音楽を味わって聴く」とは、繰返し音楽を聴く中で、その音楽のよさや美しさの理由を音楽の中から自ら明らかにし、自分にとっての音楽の価値を見付けていくことだと考える。

(2) 鑑賞領域の学習過程

鑑賞領域における学習過程を、「解説」を基に図1にまとめる。

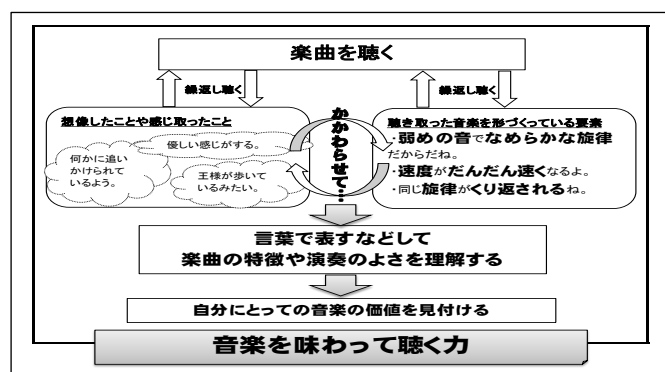


図1 鑑賞領域の学習過程

「解説」の内容「B鑑賞」指導事項（1）ウには、「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること。」⁶⁾と示されている。そのために、「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことの理由を、音楽の中から見付けて、自分の意見や感想をもつようにすることが必要となる。」⁷⁾と示されており、「曲

想とその変化などの特徴、音楽を形づくっている要素のかかわり合いから感じ取ったことを、体の動き、絵、造形、音などで表すなどして、教師や友達と意見を交換する活動は、楽曲の特徴や演奏のよさを理解することにつながる。」⁸⁾と示されている。

図1にあるように、楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを、その理由を楽曲の中にある音楽を形づくっている要素から見付けて関わらせながら、自分の意見や感想を言葉などで表すことが、鑑賞領域の学習過程には必要であることが分かる。

(3) 音楽を味わって聴く力とは

（1）（2）から本研究における「音楽を味わって聴く力」とは、繰返し音楽を聴く中で、その音楽のよさや美しさの理由を音楽の中から自ら明らかにして自分なりの意見や感想を表し、自分にとっての音楽の価値を見付けて聴くことができる力と捉える。

2 想像したことや感じ取ったことを表すためのパフォーマンス課題を取り入れた学習活動について

(1) 想像したことや感じ取ったことを表すとは

小島律子（2011）は、「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったこと」について、「『楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったこと』とは、『王様が歩いているみたい』『何かに追いかけているように』『悲しそう』というような、音楽を聴いて想像した様々な情景や様子、気持ちである。』⁹⁾と述べている。

さらに、表す方法について大熊（平成22年）は、「『言葉で表すなど』のように『など』を付していることに留意したい。」¹⁰⁾と述べ、音、体の動き、絵などによる表現も含め、表していくことも考えられるとし、言葉等を使って他者に伝えることにより、広がりや深まりが出てくると考えられる。

これらのことから本研究における「想像したことや感じ取ったことを表す」とは、楽曲を聴いてその楽曲から想像した情景や様子、気持ちを、楽曲の中から見付けた理由と関わらせて、言葉や体の動き、絵、音などを使って他者に伝えることだと考える。

(2) パフォーマンス課題とは

パフォーマンス課題を西岡加名恵（2007）は、「学んだ知識やスキルをリアルな文脈の中で使いこなすこと（総合し応用して、表現したり実践したりすること）を求める課題である。」¹¹⁾と定義している。

また、パフォーマンス課題とパフォーマンス評価について石井英真（2015）は、「パフォーマンス評

価は、狭義には、学習者のパフォーマンスを引き出し実力を試す評価課題（パフォーマンス課題）を設計し、それに対する活動のプロセスや成果物を評価する、『パフォーマンス課題に基づく評価』を意味します。」¹²⁾と述べ、パフォーマンス課題の位置付けについて説明している。

従来の実技テストとパフォーマンス課題の違いについて京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM では、ガスバーナーの操作やドリブルといった単純なスキルを単独で評価するものは、パフォーマンス・テスト（実技テスト）であり、それに対して、実験を計画・実施し、結果と考察を報告する、バスケットボールの試合をするといった一連の活動を行うことを求めるのが、パフォーマンス課題であると述べている¹⁾。音楽科においても、楽譜の階名テストやリコーダーの運指テスト等の単純なスキルを単独で評価するのではなく、思いをもって曲を演奏する等の課題が考えられる。このように、パフォーマンス課題は、複数の知識やスキルを使いこなし、実力を発揮することのできる課題である。

(3) パフォーマンス課題を評価するルーブリック

パフォーマンス課題を評価することについて石井（2015）は、「パフォーマンス課題への学習者の取り組みには多様性や幅が生じるため、教師による質的で専門的な判断に頼らざるをえません。よってパフォーマンス評価では、主観的な評価にならないように『ルーブリック（rubric）』と呼ばれる、パフォーマンスの質（熟達度）を評価する評価基準表を用いることが必要になります。」¹³⁾と述べている。またルーブリックについて石井（2005）は、「ルーブリックとは、成功の度合いを示す数値的な尺度（scale）と、それぞれの尺度に見られる認知や行為の特徴を示した記述語（descriptor）から成る評価指標のことをいいます。」¹⁴⁾と述べており、西岡（2013）はルーブリックの種類として、特定の課題に対し子供たちの作品が集まった後に作成する「特定課題のルーブリック」と、指導の前に作成する「予備的ルーブリック」を挙げている。さらに石井（2005）は、児童自身にルーブリックを理解させることにより、児童が見通しをもって学習に取り組み、理解の深まりを自己評価しながら自律的にパフォーマンスを遂行していけると述べている。

これらのことから本研究では、パフォーマンス課題に対する「予備的ルーブリック」を教師が作成し、教師と児童が題材の始めに共有することで、児童に明確な目標をもたせ、自己の到達状況を客観的に把

握させながら主体的に学習に取り組ませる。

(4) パフォーマンス課題を取り入れた学習活動の効果

石井（2011）は、「パフォーマンス課題のシナリオづくりは、子どもの想像を膨らませ、真正の文脈に彼らを引き込む手段であり、教師が提示した課題は、リアルあるいは切実な学習課題として、子どもたちに認識されねばならない。」¹⁵⁾と述べている。設定されたパフォーマンス課題には、子供達を自然に課題の状況へと引き込み、考えさせてしまうような設定が重要であることが分かる。また、G. ウイギンズ外（2012）は、パフォーマンス課題のシナリオ作りに必要な要素について6要素を挙げており²⁾、西岡（2008）は、パフォーマンス課題が現実場面の中で解決される課題であることから、6要素を可能な限り織り込むことを勧めている。

これらのことから本研究では、楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを、音楽を形づくっている要素と関わらせて言葉などで表す学習過程にパフォーマンス課題を取り入れる。パフォーマンス課題を取り入れることにより、児童が主体的に複数の知識やスキルを使いこなす場面を設定するとともに、パフォーマンス課題で表された表現を評価し、指導に生かすことに効果的であると考ええる。

3 パフォーマンス課題を取り入れた学習活動の具体について

(1) 本研究におけるパフォーマンス課題を取り入れた題材構成

パフォーマンス課題を題材にどう位置づけるかについて、西岡（2008）の考えを基に図2にまとめる。

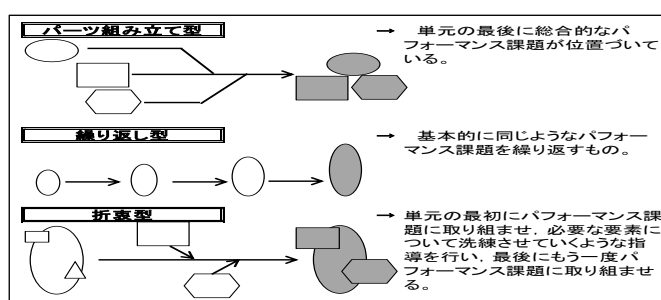


図2 西岡によるパフォーマンス課題の位置づけ⁽³⁾

図2のように西岡は、「パーツ組み立て型」「繰り返し型」「折衷型」の三つの型に分類している。鑑賞領域では、繰り返し音楽を聴く中で、楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを、音楽を形づくっている要素と関わらせて様々な方法で表し他者に

から『だから何なのか?』が見えてくるような問いでもある。『本質的な問い』を問うことで、個々の知識やスキルが関連づけられ総合されて『永続的理解』へと至ることができる。」¹⁶⁾と述べている。西岡の手順に沿って、本研究における具体を次の通りまとめる。

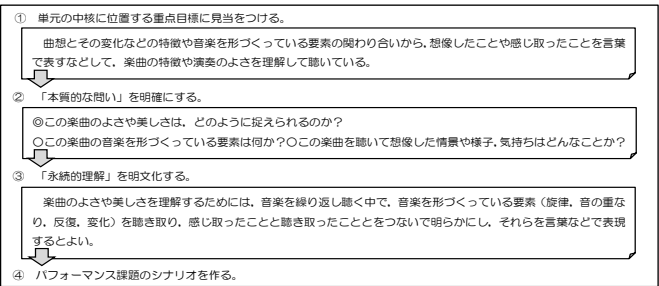


図3 パフォーマンス課題を取り入れた題材構成

また、G. ウイギンズ外 (2012) のパフォーマンス課題のシナリオ作りの 6 要素を基に、本研究で用いるパフォーマンス課題について図 5 にまとめる。

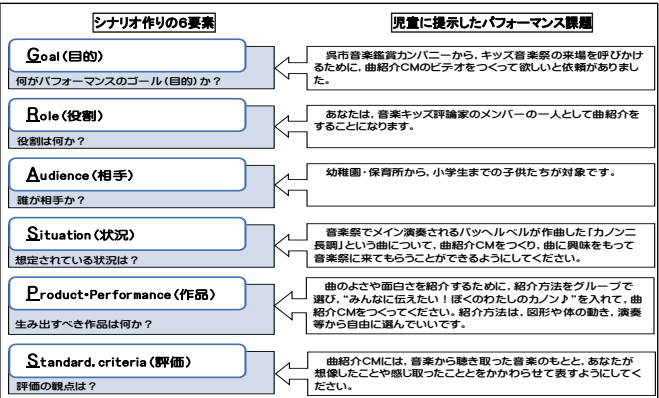


図5 パフォーマンス課題のシナリオ作りの6要素と本研究で用いるパフォーマンス課題

♪曲紹介CM 構成シート～キッズ音楽祭を成功させよう～

こんにちは！今度の夏休みに キッズ音楽祭が行われます。
みんなが来てくれるように、和庄小学校の5年生が「カノン二楽譜」を紹介するよ！

5年生組 グループ 黄色い組

♪「カノン二楽譜」 ヨハン・パッヘルレベル作品

みんなに伝えたい！
ぼくのわたしのカノン♪

この曲は
それだ

なところまでをきだよ。
(曲名が手紙にある) からだよ。

CMをきく。

さう？！何？！
この曲は誰がうたう？
この曲は？？Cの曲？

ききー！？
男の子こんな歌？
何だかおかしな曲だね！

さーん！
すてきな曲の音なん
だね！スナは曲！

キッズ音楽祭に
行ったのききー？
と！

紹介方法：

紹介方法：

紹介方法：

みなさん、いっぴが
でしたか？ キッズ音
楽祭に来てね！

CMで使う写真を組み合わせよう。(いくつかを組み合わせてもいいです。)

紹介方法その1: ①の曲名() ②の曲名() ③の曲名() ④の曲名()

紹介方法その2: ①の曲名() ②の曲名() ③の曲名() ④の曲名()

紹介方法その3: ①の曲名() ②の曲名() ③の曲名() ④の曲名()

その他:

パフォーマンス課題を作る手順について西岡（2008）は、図4にある①～④の手続きで作成することを述べている⁽⁵⁾。図4の「本質的な問い」と「永続的理解」について西岡（2008）は、「『本質的な問い』は、様々な文脈で活用できるものであり、単元を越えて繰り返し現れるような問いである。学問の中核に位置するような問いであり、生活との関連

図5のパフォーマンス課題（曲紹介CMづくり）を題材の始めに共有するとともに、パフォーマンス

課題となる曲紹介CMの構成ワークシート（図6）及びルーブリック（表1）も共有した。

表1 予備的ルーブリック

	体の動き（小課題）	図形楽譜（小課題）	曲紹介CM
3 スペシャル！	情景や様子、気持ちを体の動きで表し、複数の「音楽のもと」（旋律、音の重なり、反復、変化など）と関わらせて他者に伝えている。関わらせ方に妥当性がある。	情景や様子、気持ちを図形で表し、曲全体の变化を複数の「音楽のもと」（旋律、音の重なり、反復、変化など）と関わらせて他者に伝えている。関わらせ方に妥当性がある。	曲紹介CMにストーリーがあり、複数の「音楽のもと」と関わらせて、自分にとっての音楽の価値を見付け、他者に伝えている。関わらせ方に妥当性がある。
2 合格！	情景や様子、気持ちを体の動きで表し、「音楽のもと」と関わらせて他者に伝えている。関わらせ方に妥当性がある。	情景や様子、気持ちを図形で表し、「音楽のもと」と関わらせて他者に伝えている。関わらせ方に妥当性がある。	曲紹介CMにストーリーがあり、「音楽のもと」と関わらせて、自分にとっての音楽の価値を見付け、他者に伝えている。関わらせ方に妥当性がある。
1 もう少し	感じ取ったことを体の動きで表すことができていない。	感じ取ったことを図形で表すことができていない。	「音楽のもと」と関わらせて、自分にとっての音楽の価値を見付けていない。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

想像したことや感じ取ったことを表すためのパフォーマンス課題を取り入れた学習活動を仕組みれば、鑑賞領域において音楽を味わって聴く力を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表2に示す。

表2 検証の視点と方法

視点	検証の視点	検証の方法
視点1	○パフォーマンス課題を取り入れた学習活動は、想像したことや感じ取ったことを表すために有効であったか。	パフォーマンス課題で表された表現 事前テスト 事後アンケート
視点2	○音楽を味わって聴く力を育てることができたか	事前・事後テスト 事前・事後アンケート

(1) 事前・事後テスト

事前・事後テストでは、音楽を味わって聴く力を①～③に分け、①想像したことや感じ取ったことを言葉で表す力、②音楽を形づくっている要素を聴き取る力、③自分にとっての音楽の価値を見付ける力について、授業前後でどのように変容したかを把握するために行った。事前・事後とも同じ問題を用い、楽曲を聴いて紹介文を書かせる問題を設定した。使用した楽曲は事前を「動物の謝肉祭」第13曲『白鳥』サン＝サーンス作曲、事後を舞踏組曲「ガイース」から『剣の舞』ハチャトゥリヤン作曲とし、音楽を

形づくっている要素のうち、旋律、音の重なり、反復、変化を聴き取りやすい、既習楽曲から用いた。これらの要素は、本題材の中で扱う要素と同じである。図7に事前テストの一部を示す。

(3) A→B→Cの作品全体の流れから、この音楽を聴くとどんな感じ（想像・様子・気持ち）になりますか。またその理由を下の「音楽のこと」の欄の中から一つ以上選んで書き、自分にとっての価値を感じたいところを書いてください。

この曲を聴くと、（ ）感じ（想像・様子・気持ち）がします。それは、

①

「音楽のこと」 （音色、旋律、反復）

だからです。

この曲のおすすめは…

②

③

です。

図7 事前テスト

(2) 事前・事後アンケート

音楽を味わって聴く力についての児童の意識を把握するため、4段階評定尺度法による事前・事後アンケートを実施した。また事後アンケートには、パフォーマンス課題を取り入れた学習活動の有効性に関する児童の意識を把握するための設問を加えた。

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の内容と計画

- 期 間 平成27年6月27日～平成27年7月13日
- 対 象 所属校第5学年（2学級43人）
- 題材名 楽曲の特徴を感じ取り、よさや面白さを味わって聴こう
- 目 標 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解する。

○ 指導計画（全6時間）

時	教材	学習内容
第一時	「カノンニ長調」	○オーケストラの演奏による「カノンニ長調」の楽曲全体を通して聴き、想像した情景や様子などを発表する。○パフォーマンス課題・ルーブリックを知る。
第二時	「ファランドール」	○楽曲を聴いて体の動きや図形楽譜をつくり、想像したことや感じ取ったことのかかわりを理解する。○パフォーマンス課題に向けて見通しをもつ。
第三・四時	「カノンニ長調」	○パフォーマンス課題・ルーブリックを確認する。○楽曲を聴いて体の動きや図形楽譜をつくり、楽曲の特徴を理解する。○本時の課題「今日のカノン」（小課題）に取り組み自己評価することで、到達状況を把握する。
第五時	「カノンニ長調」	○パフォーマンス課題・ルーブリックを確認する。○パフォーマンス課題について、これまでの学習をもとに、楽曲のよさや面白さを伝えるための曲紹介CMをどのように構成するか考え、練習する。○自己評価することで、自分の到達状況を把握する。
第六時	「カノンニ長調」	○グループごとに曲紹介CMを発表する。○自己評価することで、到達状況を把握する。

2 教材について

本研究で扱う教材は、旋律、音の重なり、反復、変化を捉えやすい教材である。表3にまとめる。

表3 教材について

楽曲(作曲者)	楽曲の特徴
「カノンニ長調」(バッハ)	先行するなめらかな旋律を、一定の間において正確に模倣する手法により構成されている。またそれらを低音の旋律が反復することにより、より落ち着いた楽曲の雰囲気となっている。旋律の変化により演奏のよさを感じることができる。
「ファランドール」(ビゼー)	堂々として迫力のある旋律と、軽やかな旋律は、特徴の違いがはっきりしているため、それぞれの旋律を聴き取りやすい。また、二つの旋律が交互に反復して現れたり重なったりすることで変化をもたらし、楽曲の面白さに気がしやすい。

V 研究授業の分析と考察

1 パフォーマンス課題を取り入れた学習活動は、想像したことや感じ取ったことを表すために有効であったか

(1) パフォーマンス課題で表された表現や記述

本研究でのパフォーマンス課題を取り入れた学習活動は、曲紹介CMを発表し合う活動である。曲紹介CMの表現及び記述を表4の判断基準で分析し、事前テストの結果との比較を、図8にまとめる。

表4 「曲紹介CM」発表の判断基準
(児童と共有した表1を基に、より具体化したもの)

評価	判断基準
A (十分満足できる。)	①想像したことや感じ取ったことの原因を音楽の中から複数見つけて発表または記述している。それらに妥当性がある。 ②想像したことや感じ取ったことを、理由に表出された音楽を形づくっている要素と、適切に関連付けて紹介している。 ③①②を踏まえ、自分にとっての音楽の価値を発表または記述している。
B (おおむね満足できる。)	①想像したことや感じ取ったことの原因を音楽の中から見つけて発表または記述している。それらに妥当性がある。 ②想像したことや感じ取ったことを、理由に表出された音楽を形づくっている要素と、適切に関連付けて紹介している。 ③①②を踏まえ、自分にとっての音楽の価値を発表または記述している。
C	Bの①②の判断基準について、一つ以上が到達していない。

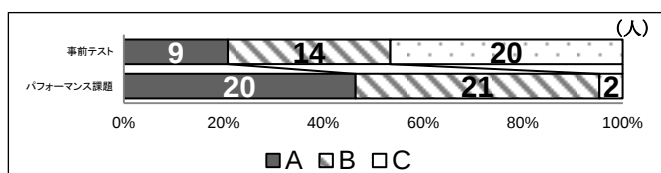


図8 事前テスト・パフォーマンス課題の結果

図8から、95%の児童がパフォーマンス課題の表現や記述においてA・B評価であった。本研究の題材構成では小題材ごとに小課題を設定し、小課題の評価を指導に生かしたことも、パフォーマンス課題の表現につながったと考える。パフォーマンス課題を取り入れた学習活動は、想像したことや感じ取ったことを表すために有効であったことが分かる。

(2) 事前・事後アンケートによる分析

また、アンケートでの児童の意識の変容を表5にまとめ、パフォーマンス課題が想像したことや感じ取ったことを表すために有効であったか分析する。

表5 「授業で音楽を聴くとき、その音楽の特徴や演奏のよさを友達に伝えようとしていますか。」に対する児童の意識の変容

事後	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	計(人)
事前					
そう思う	7	3	0	0	10
どちらかといえばそう思う	7	6	3	0	16
どちらかといえばそう思わない	6	5	4	0	15
そう思わない	0	1	1	0	2
計(人)	20	15	8	0	43

表5から事後では、音楽の特徴や演奏のよさを友達に伝えようとする意識が高まった児童が増えたことから、曲紹介CMづくりというパフォーマンス課題を取り入れた学習活動は、音楽を聴いて想像したことや感じ取ったことを様々な方法で他者に伝えることに有効であり、そのことにより、音楽の特徴や演奏のよさについての児童の考えに広がりや深まりをもたらしたと捉えることができる。

(1)(2)から、本研究におけるパフォーマンス課題を取り入れた学習活動は、想像したことや感じ取ったことを表すために有効であったと考える。

(3) 事後アンケート・パフォーマンス課題の表現及びルーブリックによる分析

事後アンケートによる、パフォーマンス課題に取り組むことについての児童の意識を図9に、その理由の記述を図10にまとめる。

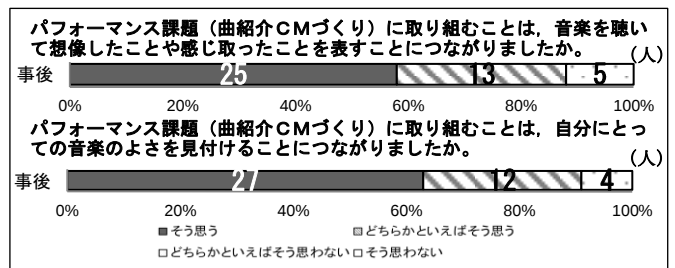


図9 パフォーマンス課題についての質問結果(事後)

「パフォーマンス課題に取り組むことは、音楽を聴いて想像したことや感じ取ったことを表すことにつながりましたか。」についての肯定的回答の理由記述
○音楽をきいて、分かったことなどを人に伝えようとしたから。
○曲紹介CMのビデオをつくるために、じっくりと想像したことや感じ取ったことを表すことについて深く考えたから。
「パフォーマンス課題に取り組むことは、自分にとっての音楽のよさを見付けることにつながりましたか。」についての肯定的回答の理由記述
○だんだんCMづくりをしていると、音楽が好きになったから。
○CMでカノンの特徴等がよく分かり、音楽のもと(せんりつなど)によりそうことができたから。
○練習やCMづくりのときに何度も音楽をきいて、その様子や理由を考えることができたから。
○自分にしかできない見付け方がわかったから。

図10 アンケート設問の回答に対する理由

図9から、パフォーマンス課題についての二つの質問項目とも、肯定的回答をした児童が、88%、91%

と、ともに高い数値となった。また図10の理由記述から、パフォーマンス課題を取り入れた学習活動により、児童は、想像したことや感じ取ったことを表したり、音楽のよさを見付けたりする学習活動に意欲を高め、主体的に取り組むことができたと考える。

また、図9の質問項目と、パフォーマンス課題で表現された評価とをクロス集計したものを、表6にまとめる。

表6 「パフォーマンス課題に取り組むことは、自分にとっての音楽のよさを見付けることにつながりましたか。」とパフォーマンス課題の表現のクロス集計

質問	課題	A	B	C	計 (人)
4		18	8	1	27
3		2	9	1	12
2		0	4	0	4
1		0	0	0	0
計 (人)		20	21	2	43

表6から、質問項目において肯定的回答をした児童の95%の児童が、パフォーマンス課題においてB以上の評価であった。このことから児童は、パフォーマンス課題のシナリオに引き込まれて主体的に活動し、音楽を味わって聴く力を高めることができたと考える。また、表1の予備的ルーブリックによる評価の変容を図11にまとめる。

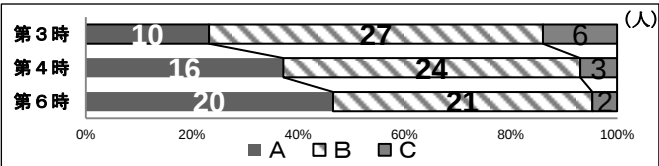


図11 ルーブリックによるB評価以上の児童の人数の変容

図11から、題材が進んでいくごとにB評価以上の児童の人数が増え、C評価の児童が減少していることが分かる。児童がルーブリックで到達状況を把握しながら学習を進める一方、指導者は評価を生かして指導を改善していった。ルーブリックを共有することは、児童にゴールの姿を明確にもたせて主体的な活動を引き出すことができるとともに、児童の自己評価と教師の評価との差違の原因を考え、それらを生かして指導を改善することができたと考える。

(1) (2) (3) から、パフォーマンス課題を取り入れた学習活動は、児童が主体的に想像したことや感じ取ったことを表すために有効であったと考える。

2 音楽を味わって聴く力を育てることができたか

(1) 事前・事後テストによる分析

事前・事後テストでは、楽曲を聴いて児童に紹介文を書かせた。表7は、事前・事後テストの判断基準である。図12は、表7を基に児童の紹介文を評価し、事前・事後の比較をグラフに表したものである。

表7 記述した紹介文を検証する判断基準

評価	判断基準
A (十分満足できる。)	①想像したことや感じ取ったことの原因を音楽の中から複数見付けて記述している。記述に妥当性がある。 ②想像したことや感じ取ったことを、理由に表出された音楽を形づくっている要素と、適切に関連付けて記述している。 ③①②を踏まえ自分にとっての音楽の価値を記述している。
B (おおむね満足できる。)	①想像したことや感じ取ったことの原因を音楽の中から見付けて記述している。記述に妥当性がある。 ②想像したことや感じ取ったことを、理由に表出された音楽を形づくっている要素と、適切に関連付けて記述している。 ③①②を踏まえ自分にとっての音楽の価値を記述している。
C	Bの①から③の判断基準について、一つ以上が到達していない。

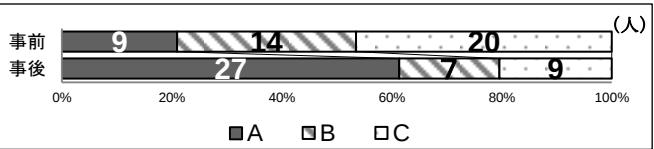


図12 事前・事後テストの結果

図12から、A評価の児童が増加し、C評価の児童が減少していることから、音楽を味わって聴く力は高まったといえる。また図13は、事前テストでC評価から事後はA評価になった児童aの記述である。

《事前テストの紹介文の記述》 この曲のおすすめは、曲の「なか」の部分が古い感じがして、すごかったところです。
《事後テストの紹介文の記述》 この曲を聴くと、 <u>おどろたくなる気持ちになります。強弱の変化がはっきりしていて、金管の音色がきれいですっきりするからです。始めと終わりが激しく、迫力があるところのおすすめです。</u>
※下線は稿者 波線は音楽のよさや美しさ、実線は児童が聴き取った音楽を形づくっている要素、点線は要素について感じ取ったこと、二重線は自分にとっての音楽の価値を示している。

図13 C評価からA評価になった児童aの記述の変容

児童aは、事前テストでは、音楽の価値について「古い感じがしてすごかった」と記述し、その理由もない。事後テストでは、「踊りたくなる」の理由を強弱・音色と二つの要素を知覚して記述し、自分にとっての音楽の価値についても「始めと終わりが激しく、迫力があるところ」とつながりが妥当である。

なお、C評価の児童が事後テストにおいて9人いた。これらの児童は、音楽のよさや美しさに対する理由が音楽の中から見付けられていなかったり、音楽の価値の記述に妥当性がなかったりする状況であることから、知覚・感受させる段階から聴き取る要素を焦点化して指導を行う必要があると考える。

以上のことから、音楽を味わって聴く力は高まったと考える。

(2) 事前・事後アンケートによる分析

図14は、事前・事後アンケートを基に、授業前後の児童の意識の変容をグラフに表したものである。

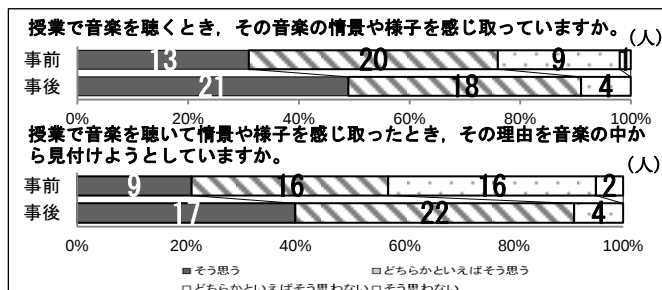


図14 事前・事後アンケートの結果

事前・事後アンケートを比較すると、事後では、どちらの質問項目においても肯定的回答をした児童が増加している。このことから、授業を通して、想像したことや感じ取ったことを音楽の中から見付けた理由と関わらせて自分なりの意見や感想を表すことができるようになったという意識が高まったことが分かる。(1)(2)から、児童は、音楽を味わって聴く力が高まったと考える。

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

パフォーマンス課題を取り入れた学習活動は、想像したことや感じ取ったことを表すことに有効であり、パフォーマンス課題を取り入れた学習指導の工夫を行うことにより、音楽を味わって聴く力を育成できることが明らかになった。

また、ルーブリックを作成し、形成的評価で積極的に活用したことで、児童の指導に成果がみられた。

2 今後の課題

研究授業を通して、音楽のよさや美しさの理由を音楽の中から見付けられにくい児童もいたことから、想像したことや感じ取ったことを音楽を形づけている要素と関わらせて伝え合う活動を取り入れたり、それらを整理したりして理解を深める学習を継続する。また他の題材、領域においても、パフォーマンス課題を取り入れた学習活動を構成、実践していく。さらにルーブリックにおいては、評価を短時間にでき、児童にフィードバックできるようなルーブリックを作成・検討していく。

【注】

- (1) 京都大学大学院教育学研究科E. FORUMホームページ「用語解説」に詳しい。http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/kenkyu_seika/1402/
- (2) G. ウイギンズ/J. マクタイ著 西岡加名恵訳 (2012) : 『理解をもたらすカリキュラム設計ー「逆向き設計」の理論と方法』日本標準 pp. 190-191に詳しい。
- (3) 西岡加名恵 (2008) : 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書 pp. 10-13に詳しい。
- (4) 香川大学教育学部附属高松小学校 (2010) : 『活用する力を育むパフォーマンス評価～パフォーマンス課題とルーブリックを生かした単元モデル～』明治図書 pp. 12-24に詳しい。
- (5) 西岡加名恵 (2008) : 前掲書 pp. 17-23に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省 (平成20年 a) : 『小学校学習指導要領』文部科学省 p. 79
- 2) 文部科学省 (平成20年 b) : 『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 p. 21
- 3) 文部科学省 (平成20年 c) : 『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 p. 25
- 4) 文部科学省 (平成20年 c) : 前掲書 p. 43
- 5) 大熊信彦 (平成22年) : 「これからの鑑賞領域の学習指導～中教審の答申、新学習指導要領の目標、内容を中心として～」『季刊 音楽鑑賞教育vol. 1』音楽鑑賞振興財団 p. 25
- 6) 文部科学省 (平成20年 b) : 前掲書 p. 63
- 7) 文部科学省 (平成20年 b) : 前掲書 p. 63
- 8) 文部科学省 (平成20年 b) : 前掲書 p. 64
- 9) 小島律子 (2011) : 『新訂版 小学校音楽科の学習指導ー生成の原理による授業デザインー』廣済堂あかつき p. 25
- 10) 大熊信彦 (平成22年) : 前掲書 p. 27
- 11) 西岡加名恵 (2007) : 「『逆向き設計』論にもとづくカリキュラム編成ー中学校社会科における開発事例ー」『教育目標・評価学会紀要 第17号』 p. 17
- 12) 石井英真 (2015) : 『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』日本標準 p. 57
- 13) 石井英真 (2015) : 前掲書 p. 60
- 14) 石井英真 (2005) : 『やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズよくわかる教育評価』ミネルヴァ書房 p. 48
- 15) 石井英真 (2011) : 『パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい p. 24
- 16) 西岡加名恵 (2008) : 前掲書 p. 20